



平成31年度研究助成 【音楽振興部門】より

伊勢神宮の神楽《鳥名子舞》に関する研究 —継承システム構築からの視点—

鹿児島大学 学術研究院
法文教育学域 教育学系
准教授

今 由佳里

1. はじめに

平成25年に執り行われた第62回神宮式年遷宮において、浄闇に御正殿から新宮への出御に先立ち「カケコー」の鶏鳴三声が鳴り響く神秘的な瞬間を覚えていますか。伊勢の神宮において「鶏」は、古代より縁深い神聖な生き物として捉えられているのです。

日の神である天照大御神あまてらすおおみかみが天の岩屋へ閉じこもってしまったため、世界は暗闇に閉ざされたという神話を耳にしたことがあると思います。この時、天照大御神を岩屋から外に誘い出すために天鈿女命あめのうづめのみことが舞を舞い、それが神楽の起源になったと言われています。そして天鈿女命の舞とともに、天照大御神の関心を岩屋の外に向けるために一役買ったのが、常世とこよの長鳴鳥ながなきどりの鳴き声でした。そのため、天照大御神を祀る内宮では、現在でも庭内に鶏が放されていると聞いたことがあります。そして「鳥名子舞とこなこまい」も、この神話の長鳴鳥に因んで伊勢の神宮へ奉納されてきた神楽舞という説があるのです。

2. 鳥名子舞の起源と沿革

鳥名子舞の起源は、天岩戸の前で鶏を鳴かせながら舞い踊った天鈿女命の歌舞であった

とも、伊勢の風俗舞であったともいわれています。また『二宮叢典』「鳥名子記」では、鳥名子舞の由来として、豊受神宮に御招きする道中に來目命くめのみことの末裔らが歌舞を舞ったもの、という記録も残されており、その起源に関しては諸説がみられます。古代には「鳥子名とこなな」という名での記録も残されています。

鳥名子舞の最初の記述は、804年の『儀式帳』に見られます。それは、鳥名子舞に際し鳥名子料を給したという記録でした。その後の『延喜式』(905)には、鳥名子舞奉仕者へ青摺衣装などの料布に関することが記されており、古くから神宮に奉納されてきた神楽舞ということがわかります。

途中断絶した時期はあったものの、一千年にわたり奉納されてきたこの舞は、明治4年の神宮大改革で、神域に神楽殿が造営され宮廷の神楽が採り入れられたことによって、終わりを告げられます。鳥名子舞は明治6年6月19日に神宮司庁から鳥名子総代への「鳥名子廃止之事」という達しによって、幻の神楽となってしまったのです。

3. 鳥名子組

三重県度会郡玉城町には、かつて山神・積良つむら・矢野・野篠・蚊野と東原という村があり、

ここには、神宮の三節祭（神嘗祭と6月と12月の月次祭）と遷宮に際して鳥名子舞を奉納する鳥名子組がありました。この鳥名子舞を奉納する家柄は、代々世襲されてきました。鳥名子組の束縛は強く、長男以外の養子先、娘の嫁ぎ先に至るまで、鳥名子組内で縁談がとりまとめられていたほどです。鳥名子組は、神役人とも称し、高い身分を有していたのです。また、鳥名子組へは、神事料として鳥名子田が与えられ経済的に相当な庇護を受けていたことがわかっていますが、乱世とともに鳥名子田は失い、その身分は保証されなくなりました。

4. 鳥名子舞の次第

伊勢の神宮では、神事芸能として行われる神楽として倭舞・五節舞・鳥名子舞がありました。『建久年中行事』（『皇太神宮年中行事』）には、「古来伊勢神宮三節祭には、奉幣後外玉垣御門前で禰宜などは倭舞を奉仕し、その妻女は五節舞を舞い、神領の童子が鳥名子舞を舞う」という記述が見られます。同様に『神宮祭祀の研究』（中西正幸氏著）には、「古儀においては倭舞・柏酒（三角柏の葉を器にして盛られた酒）・五節舞・鳥名子舞を含めた御遊がくりひろげられていた。すなわち荒祭宮の祭儀が進むと勅使・宮司以下は直会殿の座につき酒食の饗膳をかこみ、ふたたび中重に参入して倭舞をつとめ、酒立女から柏酒を受ける。さらに禰宜・

内入の妻女の舞、斎宮女官の五節舞、荒木田本郷の風俗舞ともいべき鳥名子舞へとひき継がれてゆく」という記述が見られます。また、寛文6年（1666）6月3日鳥名子組から神宮への願書によると「神事五日前には火を清め矢野村の巫女がけがれを払い、前日には二見浦に泊まって沐浴潔斎して参宮の後神事を勤めた」という、神事までの一連の流れを記した文献も見られます。鳥名子舞は、16日に外宮、17日に内宮で奉納されるのが昔からの慣例であったようです。

5. 舞振り

鳥名子舞は、6、7歳から14、5歳の子どもたちによって舞われてきました。『太神宮諸雑事記』には「鳥名子等組手を廻した後頭を一所にあつめて伏し、その後起きて各手を合わせて退出する」と記されています。また近世の舞振りとして「四人がくるくる三回廻り、廻り終わつて行違ひになり、かう鳥の真似と云ふのか、三度俯向きます。俯向くとき、ピーイー、ピーイー、ピーイーと笛を鳴らします」という記録も残されています。なお装束については、鳥名子の童子は、青色の水干に紫の帯を垂れ、鶏の冠をいただいた装束を身に付けていたという記録も残されています。



図1 鳥名子舞の様子『神都名勝誌』より
(神宮司庁蔵)

6. 音楽

鳥名子舞には、歌や笛、琴が付随していました。これらの音楽は、主に東原の土地のものが担当したといわれています。その楽器構成は弾こ琴2人、ふえ笛生2人、うた歌長2人というものでありますが、時代によってその編成は多少異なっていると推察されます。弾琴と笛生を勤めるのは東原、歌長は野篠の長おし氏（中村家）が代々世襲してきました。

歌詞については、時代によって変遷がみられます。『皇太神宮年中行事』に採録されている鳥名子舞の歌詞では、酉の刻、瑞垣御門外側に参候して六首の歌を奉納、その後、斎王候殿と舞姫候殿の中間で十二首が奏されます。これらを歌舞した後「アマノオヒ アマノオヒ」とい

う呪言を三度唱えます。

現在、歌の旋律に関する記録として宮内庁および神宮文庫にその存在を確認しています。神宮に所蔵されている歌譜には、五番の歌舞後、和琴が「三折三三三四三折」と記述されています。この和琴の譜から、鳥名子舞は壺越調で奏されていたことは判明していますが、ごくシンプルな譜しか残されていないため、旋律の解説には少し時間がかかっています。

琴に関しては、和琴とは別とびのおんことに鶺尾御琴が用いられた時代もあります。鶺尾琴という名称は、琴頭が鳥の尾羽のように見えることに由来しており、平安時代から神宮の神宝21種の一つに数えられていました。中世の鳥名子舞で用いられた琴に関して、倭舞や五節の舞の時に用いた同じ琴で、忌火屋殿に置いて神聖視した呪力ある琴である、という記録が見つかります。

7. 鳥名子舞再興への道のり

7年前のある秋の日、研究室に三重県玉城町教育委員会の方から鳥名子舞再興に関する一本のお電話をいただきました。伊勢の大学に勤務していた頃、筆者の笙と和琴の師であり、伊勢神宮雅楽課楽長を務められていた東浦秀明氏に「鳥名子舞」についてききとり、研究ノートをまとめたことがあったからです。鳥名子舞は明治6年に廃止してから伝承が途絶え、歌詞は残されているものの舞や音楽に関する記録はご

くわずかしか残されておらず、再興には困難を極めることだろうとその時思った覚えがあります。その後、町より再興協力の依頼を受け、鳥名子舞を再現して初披露を行いました。ここで発表した反響は大きく、かつて終戦直前の幼少時に森井家の庭で鳥名子舞をひっそりと伝授されたという80歳代の男性や、代々受け継がれてきた古文書の中に鳥名古舞行事次第に関する文書が残されているという鳥名子組子孫の方など、次々と新たな情報が寄せられることとなりました。明治6年に廃止を申し渡された鳥名子舞ですが、再興に早急に着手すれば、次代への継承は難しいことではないと希望を感じられるものだったのです。

附記

本稿は、神宮司廳発行『瑞垣』第231号に所収された筆者の論考「伊勢神宮と幻の神楽『鳥名子舞』」を基礎に、近年の動向を加筆して再構成したものです。

謝辞

本稿執筆に際し、図資料をご提供いただきました神宮司庁に心より感謝申し上げます。また、本研究に関しまして、研究助成音楽振興部門音楽学系を賜りましたカワイサウンド技術・音楽振興財団に心より感謝申し上げます。